

六月 嘉祥菓子

「旧暦 6月16日はお菓子を供え、日々の

無事を感じ、**「嘉祥の儀」**を行う日。

— 「嘉祥菓子」とは、どいついた行事なのでしょうか？

起源は諸説あるようですが、水無月は梅雨時で湿気が多いため、昔から疫病がはやる季節と恐れられており、
国中に疫病が蔓延した⁸⁴⁸年平安時代、6月¹⁶日にお菓子やお餅を神様に供えて、疫病退散と招福を願う「嘉祥菓子の儀」を行い、元号を「嘉祥」と改めたことにはじまると伝えられています。

「嘉祥菓子」は、あまり聞き慣れないかもしれませんが、この日は昔から和菓子を楽しむ日として知られていた
そうで、平安時代に生まれた嘉祥の日は、明治時代には廃れてしまったのですが、1979年に全国和菓子協会によって「和菓子の日」として復活したそうです。

今回は、「嘉祥の儀」に沿って、クルー皆で「とらや」の羊羹を頂きました。「とらや」の羊羹と言えば有名ですが、「嘉祥の儀」の時期限定販売の嘉祥蒸羊羹を頂きました。

お菓子にも歴史があり、コンビニやスーパーでは、様々なお菓子が売られていますが、当初は厄除や福を招くためということは知りませんでした。社内では、コーヒー紅茶を飲みながらお菓子を食することがありますが、一息つきながら様々な話で盛り上がります。子どもたちも毎日おやつを園で食べていると思いますが、間食という意味だけでなく、本来は疫病退散や招福の願いが込められていたようです。



行事という何か大きなものをイメージ

ジしてしまいがちですが、子どもたちにとっては毎日のおやつ時間も、一日の中での大きな行事であり、甘いものを食べると幸せな気持ちになるのは、今も昔も変わらないことなのかもしれません。今回は、クルー皆で羊羹を食べながら、季節の行事「嘉祥菓子」について味わう取り組みとなりました。



■虎屋の「嘉祥蒸羊羹」。

江戸時代、六月十六日には菓子を食べ厄除招福を願う「嘉祥」という行事があり、江戸城では、大広間に二万を超える菓子が並べられ、大名・旗本に下賜（かし）されました。「嘉祥蒸羊羹」は、この菓子の一つを再現したものだそうです。



■「水無月」という和菓子

小豆がのり、それぞれに意味が込められています。上部にあたる小豆は、悪魔祓いの意味があり、三角の形は、暑気を払う「氷」や、厄除けの「うるこ」をあらわしています。



■「祝い七つ菓子」の盛り物

「祝い七つ菓子」という言葉にちなみ、和三盆干菓子と金平糖の菓子を7種盛ってみました。東西南北天地の6つの方向に盛る人の心を加えて7種類、色も方向も五行に合わせ、「季節が正しくまわってほしい」という願いも込めています。



■嘉祥の日の由来

平安時代中期、仁明天皇（にんみょうてんのう）の時代に疫病が蔓延したことから、仁明天皇は元号を「承和」から「嘉祥」へと改めたそうで、嘉祥と改めた元年（848年）の6月16日に、厄除け・健康招福を願って16個の菓子や餅を神前に供えた「嘉祥（かじょう）の儀式」が行われたそうです。

その後、時代を経て江戸時代には通貨「嘉定通宝」の嘉通が「勝つ」に通じることから縁起が良いとされ、6月16日に嘉定通宝16枚をもって嘉祥菓子を求め、それを食べると悪魔や災いを祓い、幸を招くとして広く行われたとか。

明治時代になると、嘉祥の儀式は廃れてしまったそうで、今はあまり馴染みのない行事となりましたが、それでも、和菓子屋さんに行けば、こうした厄除けの和菓子が販売されていることも知り、自分が知らなかっただけで、ちゃんと大事に残してくれている方々の存在にも気付いてなんだか感動しました。室礼を通して、様々な行事を知ったり深めたりする機会を頂いてますが、こうして、それを皆で共有できたり体験できたりすることもまた、幸せなことだと実感するからこそ、こんな豊かな行事や文化を、やっぱり子どもたちにも残していけたらなと思うのです。